

九 佛魔一紙の分水境

元日の吉凶については、色々面白い話が遺つて居ます。早朝、土瓶を打ち割つた下女、危ふく主人の大目玉を頂く處を、

元日や土瓶と貧の底ぬけて、あとに残るは金の釣のみ

と詠んで、却て大賞にあづかつたなどは、仲々氣がきいてゐる。

茲に山田潔と云ふ人。羽織袴に身をしつらへ、屠蘇雜煮餅も祝ひ終つて、扇子片手に、いざ廻禮と出かける處を、十歳ばかりの乞食が門前で泣いて居る。いや何たる不吉な事であらう。山田君は氣が氣でない。一年の計は元旦にありと云ふに、縁起でもない、元朝早々泣聲を聞く。今年も目茶々ぢや、いまくしい。いつそ廻禮を止めやうかと思つたが、ふと思ひ出したのは寺の和尚さんである。和尚さんに願ふなら、此の不祥事を赦うて下さらぬこともあるまいと、足を急いで檀那寺へまゐりた。和尚さんに面會して「門前で子供の泣いて居た不祥を赦ひ除いて下さい」と頼みますと。和尚さんはニコくしながら「山田さん、此様な喜ばしいことはない、昨年まではお前さんも、貧乏神に取りつかれて居たと見えて、月末毎に首も廻らぬ苦しさであつたが、今年は福の神が舞ひ込んで來たのぢや」と云ふ。山田はドーモ合點がゆかぬ「ナニ小供の泣いて居たのは、福の神が舞ひ込んで來たのだと云ふのですか、馬鹿くしい」。イヤ山田さん能く聞きなさい、一首の歌ぢや、

七福に貧乏神が迫ひ出され、門の處でわいくと泣く

「成程これはあり難い。不吉ぢや不祥ぢやと思ふたがこんな喜ばしいことはない」と、機嫌直して禮廻りをすまして、我家に歸つたは丁度正午時であつた。

さも愉快さうに妻に向ひ「今朝寺の和尚さんから、誠にめでたいことを承はつて来た。外でもないが、今朝廻禮に出かけると、門前で小供が泣いて居る、さて不吉な事ぢやと思つて氣を腐らして居ると、流石は寺の和尚さん、七福が貧乏神に追ひ出され、門の處でわい／＼と泣く。ドーダめでたからうが」と云ふと、妻は怪しげな顔つきで、「モ一一度云うて下さい、其歌を……」。「ウム能く聞け、七福が貧乏神に追ひ出され……」。「なんと仰る、七福が貧乏神に追ひ出され、それが何で目出度いのです」と云はれて「なるほど是は怪しからぬ、元旦早々寺の和尚め、人を瞞しよつたな……」怒氣満面直に寺へ驅け付けた「今朝聞かせて下すつた歌は、何と云ふのでしたぞ」と問へば。今朝の歌か「七福に貧乏神が追ひ出され、門の處でわい／＼と泣くと云ふのぢや」と答へる、「成程、やはり内の嬢めが間違へて居たのぢやドーモ有難う、左様なら」と捨言葉を残して立歸つた。寺の和尚さんは、何が何だか、サツパリ譯が分らぬ。山田は家に歸るなり妻に向うて「やはり貴様が間違へて居たのだ、和尚さんには間違ひはない、耳の孔をさらへて能く聞け、七福が貧乏神に追ひ出され門のところ……」と云へば「七福が貧乏神に追ひ出されて、何が目出度いのです、貴郎はドーカして居なさる」と云はれて見れば一言もない「七福が貧乏神に追ひ出され……なるほど是は變な歌ぢや、寺では大層めでたい歌ぢやつたが、家へ歸ると不吉な歌となる、妙ぢやナア、よしくモ一一度寺へ行つて尋ねて來る」と云つて、三度目に寺の和尚さんに遇うて、今度は其歌を紙に書いて貰うて家へ歸つて妻に示した。好く／＼仔細に吟味して見ると、七福にを七福がと誤つたので、目出度い歌がとんと不吉な歌となつたのであつた。

元來、小供の泣聲に、何時のかはりはなければ、祥不祥の別もない。唯そ

の人の心得如何にあるのみ。にとがの入違ひが、祥不祥の分岐點たる如く、
世は眞に佛魔一紙である、心を弘誓の佛地に樹てよ、念を難思の法海に流せ
よ。人生は實に汚濁にして罪惡の結晶なるも、其まゝ如來の慈光は、皓々と
して照耀無礙なる尊き。茲に徹見して、樂き人生は來らん。

世の中はこそその二文字の付け處、治まるもこそ亂るゝもこそ